熱田神宮
宝物館だより

熱田神宮宝物館
編集　内田雅之

〒456-8585
名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号
TEL (052)671-0852　FAX (052)671-1202
(年6回発行)

3月1日（金）～3月26日（火）
(期間中無休)
※展示品は毎月入替いたします

3月展示品より

後奈良天皇筆和歌短冊（部分）

伝 後奈良天皇筆和歌短冊（向かって左）　1枚　室町時代
伝 後西天皇筆和歌短冊（同右）　1枚　江戸時代
長39.7cm　上幅4.2cm

向かって左は第105代後奈良天皇宸筆と伝わる和歌短冊である。上下を藍・紫の繊維で染め、金の彩色で乾燥を防ぐために牛車の車輪を川に漬ける「片輪車」の意匠や、草花を散らした料紙に、「七夕の　とわたる舟の　かちのはに　いく秋かきつ　露の玉章」と新古今和歌集に載る藤原俊成の和歌をしたためている。

同じく右は第111代後西天皇宸筆の伝をもつ和歌短冊である。上下を同じく藍・紫の繊維で染め、全体に流水をあらわし、金銀で桐を始め、花弁や葉を散らした料紙に、「おきあかす　秋のわかれの　袖の露　霜こそむすへ　冬や来ぬらん」と、同じく新古今和歌集に載る藤原俊成の和歌をしたためられたものである。

これらのように藍や紫で料紙を染めたり文様を描いたものや、金箔や銀箔・切箔などで鮮やかに彩られたものを「装飾料紙」と称している。

前略 拝観者の皆さまへ

（新春特別展「熱田神宮名宝展 ～宝物から見る歴史と信仰～」を振り返って）

平成31年1月1日から1月29日まで、当館では「熱田神宮名宝展 ～宝物から見る歴史と信仰～」と題して、宝物を通して当神宮の歴史と信仰の篤さを感じて頂く新春特別展を企画し、会期中、17,368名の方々にご来館頂きました。本項では、宝物館の出口に設置して任意でお答え頂いたアンケート調査の結果もご紹介しながら本展を振り返ってみたいと思います。

当館では例年新春に、他館が所蔵する文化財、また社寺が所蔵する貴重な宝物を借用して展覧会を開催するのですが、およそ5年に一度は今回のような当神宮の宝物のみをご覧頂く展覧会を企画しています。

災害時や災害が予想される際、行政により「避難勧告」が発せられることは、皆さんご存知のことと思います。実は、文化財の世界にも「勧告」という言葉があるのを知っていましたか？一つに「勧告出品（かんこくしゅっぴん）」というものがあります。つまり国が所蔵者に対し、文化財の出品を命ずるものです。当神宮が所蔵する国指定文化財の宝物も、一部を東京国立博物館で管理頂いており、それらの宝物は常時の平常展ではご覧頂くことができません。よって、上記のように約5年に一度、東京国立博物館から出品宝物の一時返還を願い出て、東京から名古屋まで専門業者が運転する美術品専用車に同乗して宝物を輸送して名宝展を開催しています。言葉を変えれば、一種の「里帰り展」でしょうか。当然「名宝展」ですから、優品をリストアップします。今回の名宝展の展示品数は86点でしたが、その内56点が指定品（国・県指定も含む）でした。アンケートのコメントには、「大変すばらしい物を見せて頂きました。ありがとうございました。」と記入頂いた市内在住の女性や、「いつも貴重な品物をありがとうございます。」とお答え頂いた三重県から参拝方々ご来館頂いた男性もいらっしゃいました。また、近年のブームで所謂「刀剣女子」からのコメントも多く、「長谷部派の刀が好きなので見れてうれしかったです。また来ます!!（岡崎市 女性）」、「刀剣のライティングがいつも見やすくありがたいです。（県内 女性）」などの記述も見られました。そして、「ふくやふろしきの、もようがきれいで、ふるいものが、まだのこっているなんて、おもいませんでした。カタナのしゅるいがたくさんあるなんてしりませんでした」と自分の想いを一生懸命書いてくれた市内の女子児童。「刀剣女子予備軍」の誕生でしょうか…

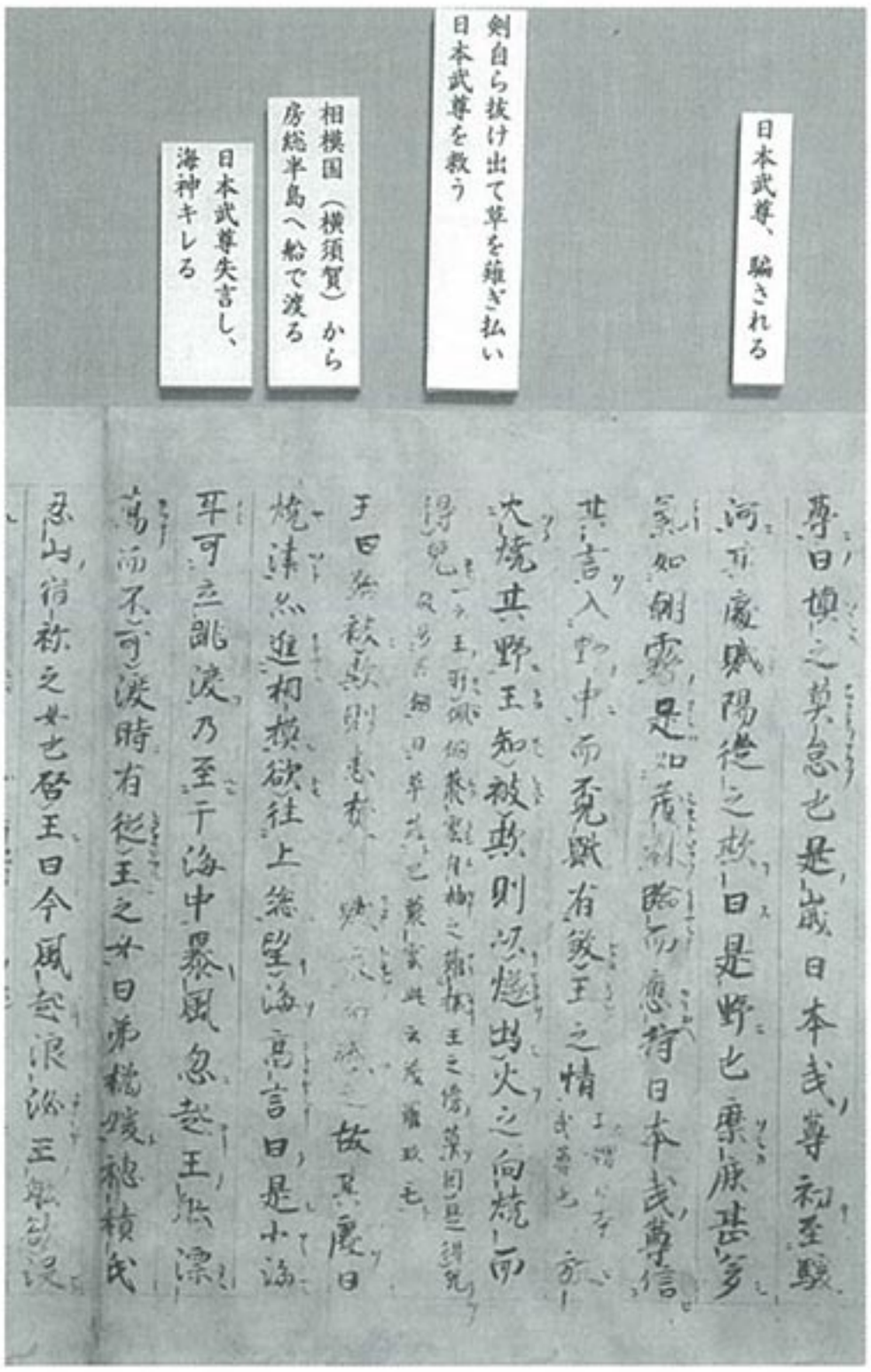
今回のアンケートでは32名の方々が回答を寄せて下さいました。質問項目は「性別」・「年代」・「すまい」・「展示内容」・「展覧会を何で知ったか」など、10個の項目にお答え頂きました。ここ数年、特筆されるのは、「展覧会を何で知ったか」という項目（回答：新聞・雑誌・看板・知人の紹介・参拝時・インターネット・その他）

で、インターネットの欄に丸をつける方が増えたことです。これまでは断トツで「参拝時」と答える方が多く、全体の7～80%を占めていましたが、今回の集計では参拝時が48%（14名）、インターネットが27%（8名）という結果が出ました。拝観者総数からみる回答結果からすれば、正確ではないかも知れませんが、貴重なご意見として承りたいと思います。

さて、全国には多くの美術館・博物館があり、各地でさまざまな展覧会が開催されています。そして、その館の性格やコンセプトによって企画内容もさまざまです。また、企画する担当者によっても展示内容や展示会場の雰囲気は、まさに十人十色です。

今回の名宝展は、所蔵する宝物を通して、当神宮の素晴らしさ、また、御祭神の御神徳を感じてもらえることを念頭におきました。それには難しい専門用語や言い回しは避け、多くの方々に、まずは宝物そのものをご理解頂いた上で、当神宮をより身近に感じて頂くことに努めました。その甲斐あってか、「解説の難易」についての回答は、2名の小学生による「難しい」との回答もありましたが、「充分わかりやすい」が11名、「わかりやすい」が12名と全体の回答のおよそ80%の方にご理解を頂けたようです。そして企画担当者が一番気になる満足度ですが、「満足」が22名、「やや満足」が4名、「普通」が3名と高評価を頂き、胸を撫で下ろしています。

実は今回、遊び心をもって作成した見出しパネルを『日本書紀』の展示場所に添えました。当神宮の御祭神の一柱である日本武尊が東征の折、相模国（現 神奈川県）から上総国へ向かうため現在の神奈川県横須賀市辺りから対岸の房総半島へ海路で渡ろうとします。すぐ目の前に見える半島を前に「これくらい簡単に渡れるよ」との尊の発言に、海神（わたつみ）は怒ってたちまち暴風を吹き荒らし、尊の渡航を困難にさせる様子が記されています。その光景をつぶさに記すと上記のように長い見出しになりかねません。そこで「何か短い言葉でインパクトのある見出しは出来ないものか…」と思案した末に思いついたのがこの言葉です。「日本武尊失言し、海神キレる」。神社博物館であること、尊は御祭神の一柱であることから、本来は禁じ手だったかも知れませんが、お叱りを覚悟の上で添えてみました。因みにこのパネルの3つ右の箇所は、尊が駿河国で賊に騙されて火を放たれ窮地に立たされる有名な場面ですが、ここは「日本武尊、騙される」とのみ表記しました。いつお叱りを受けるかと冷や冷やしていた中で迎えた最終日、閉館後に後片付けをしていると、アンケート回収箱には2枚の用紙が… その内の1枚には「【海神キレる】に笑ってしまったが、学生など若い子も親しみを持ってもらえそうで、こういった表現も面白いなと思った。」と、20代・名古屋市近郊の市からお越しになった女性からのコメントが!! わずか17,368分の1のメッセージではありますが、私の意図を汲んで下さった方がいたことが判り、嬉しい気持ちになりました。ありがとうございます。これからもわかりやすいキャプションを考えながら、時にホッコリするようなエッセンスを盛り込んでいければと思います。そんな熱田神宮を是非身近に感じて頂き、宝物館にも足を運んで頂ければと思います。



重文　日本書紀（巻第七　部分）

4月平常展 ― 熱田神宮宝物展 ―

3月29日（金）～4月23日（火）
（期間中無休）
※展示品は毎月入替いたします

コーナー展　―尾張の画人たち　～所蔵品を中心に～―より

（部分）

少彦名神像（すくなひこなしんぞう）　紙本著色　1幅
縦 128.0cm　横 30.0cm
織田杏斎筆　現代

少彦名大神（すくなひこなのおおかみ）は神産巣日神（かむむすひのかみ）の子で、大己貴命（おおなむちのかみ）（大国主命（おおくにぬしのみこと））と共に国作りをした神である。古事記には「少名毘古那神」、日本書紀では「少彦名命」と表記され、手の指の間からもれ落ちるほどの大きさといわれる。また、酒を掌（つかさど）る首長として、医薬の神、さらには温泉の神としてもあがめられる神である。

本画は少彦名大神が酒を掌る神であることに因んで酒甕を脇に置き、柄杓を手に奉持した姿が描かれている。また、下方には当神宮で明治時代宮司を務めた角田忠行（1834～1918）が「酒造大祖少彦名大神」と、神号を書している。

画面下の判には「皇朝酒造祖未曾有定説多年考究之次得角田熱田宮司各論乞杏斎画伯製此図一百幅卜明治廿八年十一月十八日張開業一紀之祝延贈之同好諸君是其一也　森川猪三郎敬蔵」とあり、明治28年（1895）11月、盛川猪一郎が酒造業の記念と繁栄を願い、角田忠行に大神の考証と揮毫を、画は地元画家である織田杏斎（おだきょうさい）（1845～1912）に大神像を依頼して完成したことが知れる。

当神宮では末社 内天神社（うちてんじんしゃ）、末社 玉根社（たまねしゃ）においてお祀りされている。

その他の主な展示品

◎重文　○県文

《書跡・古文書》 ○勧進紗門 某 熱田大神宮修造勧進状　○寛永十三年熱田万句　○熱田神宮古文書　他
《絵　画》 旭日桜花－横山大観筆－　春景山水図－村瀬環山筆－　旭日雄姿図－一江芳秋筆－　他
《工　芸》 ◎黒漆根古志形鏡台　◎入帷残闕　◎朱漆弓　「夢の中へ」（衣通姫）－高村晴雲作－　他
《刀　剣》 ◎剣 銘 包利　○剣 無銘（倶利伽羅剣）　太刀 銘 千手院　剣 無銘　太刀 銘 兼吉　刀 銘 兼元　他
《コーナー展示 尾張の画人たち》 舞楽之図－渡辺清筆－　古楽器之図－渡辺清筆－　寒詣図－伊藤君樵筆－
七夕図－森高雅筆－　日本武尊像－佐藤正教筆－　熱田大山祭図－小寺稲泉筆－　蓬莱仙境図－石川英鳳筆－